

まちづくりアンケートにご協力ありがとうございました

このたびは、町づくりアンケートにご協力いただきまして誠にありがとうございました。ただ今、アンケート作成の中心となっておりました鳥取大学地域学部筒井ゼミの3年生に集計・分析を行っていただいています。

集計・分析が終わりましたら、アンケート報告会を開催すると共にアンケート結果を各ご家庭に配布させていただく予定です。また、アンケートの結果分析を大宮まちづくり5カ年計画に活用させていただきます。あらためましてご協力ありがとうございました。

<アンケートの回収について>

① アンケート回収者数

○大宮在住者 53人
○大宮出身者 20人

② キャッチフレーズの投稿者数

○大宮在住者 16人
○大宮出身者 7人

② 5カ年計画に携わりたい方

○大宮在住者 39人
○大宮出身者 7人



表紙の人



佐藤範明さん (76歳：宝谷)

佐藤さんは繁殖和牛の親牛5頭、子牛3頭を飼育しています。牛の飼育はおじいさんの代から始まり、佐藤さんで三代目になります。

「私が飼育を始めて約30年。毎朝牛と話ができることと、きれいにえさを食べてくれた時が一番うれしい」と、牛をなでながら話してくれました。

また、牛を飼う人が少なくなって寂しいが、今年は丑年なので育成してよい牛を育てたいと、力強く語ってくれました。

編集・発行 大宮まちづくり協議会

<<お問合せ>>

大宮地域振興センター
〒689-5531
鳥取県日野郡日南町印賀1516-1 おおみや
TEL・FAX (0859)87-0911
Mail: skn0400@town.nichinan.tottori.jp
satoyamaoomiya@sea.chukai.ne.jp
blog: <http://blog.zige.jp/satoyamaoomiya/>
“じげプロ”よりお入りください



編集後記

◆1か月遅れの発行となった。◆コロナコロナの1年間であった。集会はダメ、飲食はダメ、帰省もダメ、計画したイベントはほぼ中止せざるを得ない状況となった。◆今年は丑年である。大宮のまちづくりの5カ年計画を作成するが、アイデアを出し合い、牛歩でもよい、着実に今より住みよい大宮にしていこう。ご協力をいただきたい。つながろう大宮人(おおみやびと)。(青)



さらさら
おみやびと

No.81

牛のようになんか一歩一歩着実に前進する年にしよう。

大宮フチ美術館にスケッチ画を展示中

大宮地域振興センター1階に「大宮フチ美術館」を作りました。小学校当時は、図書館や食堂として活用されていた部屋です。その部屋にコンパネを壁に貼り、簡易の展示板にしました。

そこにただ今、白井ユタカさんのスケッチ画を展示しています。白井ユタカさんは、大阪府河内長野市在住の方で、白井ユタカさんの奥さんは、印賀上横見の大塚小夜子さん（旧姓）です。40年前ぐらいから大宮に帰郷の際に大宮を中心にして、スケッチしてまわられた作品です。



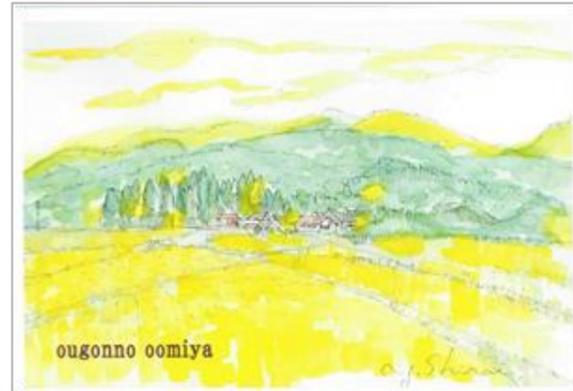
現在の大宮と違いとても懐かしい風景を見ることが出来ます。ありがたいことに白井さんのご厚意により、気に入ったスケッチ画をハガキの大きさに縮小して差し上げます。是非、ご覧いただきたいと思います。

白井ユタカさんの作品は、大宮フチ美術館の常設展示作品として保管展示いたします。今後も帰郷の際には、大宮の風景をスケッチしていただくようお願いしています。

新年度になりましたら、ゆっくりとご鑑賞ください。お待ちしております。



「普音寺の石仏」



「黄金の大宮」

大宮フチ美術館は、住民のみなさんにも無料でお貸しします。自分の作品展示をはじめ、自分で企画した作品展など地域住民のみなさんの生涯学習の一環としてご活用ください。

なお、総務学習部でも企画展を計画する予定です。まずは、「昭和の大宮(仮称)」と題し、昔懐かしい大宮の写真を展示していきたいと考えています。

大宮フチ美術館の「美術館名」または、「愛称」を募集いたします。親しみやすい名前をお待ちしています。地域振興センターにご連絡ください。

印賀の砂鉄で「油滴天目茶碗」を

昨年10月28日から11月1日までの5日間、日南町美術館で岡山県井原市の陶芸家高橋正志さんが個展を開催されました。

高橋さんは備前焼の古典的技法を復活させるため、技術研究を重ねながら、備前の土と印賀の砂鉄を使い、国宝の「油滴天目茶碗」に取り組んでおられます。

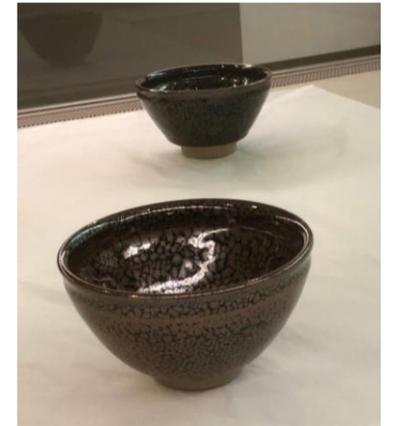
この5日間の展示では、その作品が初公開されました。



高橋正志さん



油滴天目茶碗



油滴天目茶碗

岡山県内でも砂鉄は手に入れることはできると思います。なぜ印賀の砂鉄を使おうと思われたのかを訪ねてみました。

高橋さんは、「私の祖父が、私が幼いときからよく刀剣の材料となる玉鋼について語っていました。その中でも『印賀ハガネ』の素晴らしさをよく語っていました。『印賀ハガネ』は、日本一のハガネであるとよく聞いたものです。このたびの『油滴天目茶碗』の作製にあたり、祖父の言葉を思い出し、『印賀ハガネ』の原料である印賀の砂鉄が素晴らしいのだろうと思ったわけです。」と話してもらいました。



油滴天目茶碗

失敗続きであったが、ついに成功し、このたびの個展で初公開となった。高橋さんは、このたびの個展はどうしても日南町でやりたかったそうです。それは、「印賀の砂鉄」のふるさとである日南町で行いたかったのです。

このたびの高橋さんの個展から、江戸時代に青砥孫左衛門が命名し、ブランド化した「印賀ハガネ」は、この令和の時代にも生き続けていることをあらためて感じました。私たちの誇りでもあります。これを絶やすことなく語り継ぐことが、私たち大宮人の務めのような気がしてなりません。

白井さんのスケッチ画にしても高橋さんの油滴天目茶碗にしても、私たちの住む大宮の再発見に気づかせてもらうきっかけとなりました。